
変化しすぎな少女達～噂の田中さん

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変化しすぎな少女達〜噂の田中さん

【Nコード】

N0871M

【作者名】

空

【あらすじ】

小学校から高校まで、9年間と言う一途な恋心を田中小夜に抱いていた稲垣蓮は、高校1年生の夏、感動の再開を果たす。はずだったが、いきなり彼女に思い切りビンタされ。お人よしで女の子らしかった彼女は一体どこへ……。何故か高校に入ってモテ始めた蓮の一途なラブストーリー。主人公、田中さん以外の男女に腹黒すぎ……。

再開はピンター発（前書き）

下手な小説ですけど、よろしくです。（TOPブラザー）

再開はビンタ一発

九年前。

まだ僕が母親に頼っていた頃。小学校の入学式に時、僕は君に一目で恋をしてしまった。その頃はまだ、小学校1年生で6歳と言う年齢だけあって、まだ本当の好きではなかった。でも、段々成長するにつれて、好きがどう言う意味なのかを分かり始めた時、僕の君に對しての気持ちかはつきり「好き」と確信した。

そして、中学生になるまで、自分の気持ちを隠そうと決めた。しかし君は僕と同じ中学校には行けずに離れてしまった。3年間と言う年月が経ち、僕等はやっと再会を果たす事ができた。

- パチン -

はずなんだけど……。

僕こと稲垣蓮は九年間思い続けていた女の子、田中小夜さんにビンタを一発食らっている。理由はこうだ。高校の入学式に初対面の女の子に告白され、即答で断ったらその女の子の友達が、田中さんだったらしく、話を聞いた田中さんが怒って僕にビンタしたと言う訳だ。

「
……」

何分か沈黙が続いた。告白して来た女の子はオドオドしているのに

関らず、3年ぶりに再会した田中さんは僕を睨んでいる。目つきは、多分睨んでいるから細く見えるが、多分変わっていないだろう。顔も幼馴染ーズよりも、小学校の幼さが残っており子供っぽい。

「稲垣君、もっとまじな断り方って言うの思いつかなかったの？」

やっぱり目は小学校の頃と変わっていなかった。

「うーん……フォローしながら断ると、余計に傷つくと思って」

「ほ、本当にもう大丈夫だから……ね？」

聞きたくないと言う様に、僕の声を遮る様に隠れていた女の子が言った。あー言う子に良く告白されるけど、一番苦手なタイプだ。友達に断られたと言って友達に文句を言わせる子。最終的にはいい子ぶって止めさせる。そう言う子は一番嫌いだ。しかも言った相手が田中さんだったら尚更……。

「ほら、彼女もそう言ってるし授業も始まっちゃうよ？」

「……うー……」

唸る彼女は小学生の頃と同じだった。違っているのは口調と性格の半分だと思う。多分彼女は口より先に手が出る。扱うのには大変そうだ。でも、小学生の頃の彼女はお人よしで、少しドジだったけど隙が無かった。僕からするに彼女は小学生とは違うどこか抜けてる

感が出てる。背も小さいし……。

「なあに一人で考え込んでるのよ」

「美代……どうしてこんな所に？」

「先輩が呼んでるから、探してたのよ」

美代。府川美代。彼女とは、幼稚園の頃から高校までずっと一緒の幼馴染だ。彼女も中々の美少女だが、田中さんには敵わない。あくまで僕視点だけど。

「先輩？どうして」

「どうしてって……あ、ちなみに男よ」

「女かと思った」

ニコリと笑う僕に、自惚れるんじゃないわよと捨て台詞を言って、教室に戻っていった。それを眺めながら、先ほど田中さんに叩かれた頬に手を当てた。痛さはまるでない。でも、心の傷は痛む……何てくさい事を思っている自分がおかしかった。

「……はあ」

五時間目の授業は自習って言ってたし、サボろつか。高校生活3日目には散々と言うよりも疲れた。田中さんに会えてうれしかったけど、

あんな再開だったのが傷だけど。

「それにしてもどこから抜けようか」

「あっちの方に裏口があるから……」

先程聞いた様な声がした。田中さんかなと期待していた俺は一瞬にして恥かしくなった。横に居たのはさっき田中さんの後ろに隠れて止めていた女子。名前忘れたけど……。

「ありがとう、えっと」

「あ、山田^{いお}衣緒って言います」

「そう、名前覚えるの自信ないけどよろしく」

一言言つて、僕はその裏口に向かった。……おかしい。何も無いではないか。裏口どころかドアすら見当たらない。学校案内でも裏口なんて言うのはなかった。……とするとあの山……何とかさんが嘘を吐いたって訳か。

「よっ……」

教室に戻ろうとした僕を引き止めたのは、いかにも不良ですをアピールしている様な格好の長身の女性。黒髪で、マスクをしている。しかも学ラン……。ここは学ランじゃないぞ。女子はブレザーだ。男子も学ランではない。

「……………えと？」

「お前、あたしの妹を思い切り振ったみたいだな」

「妹？もしかして山なんとかさん？」

あー……………そう言う事か。何となく状況が読めた。要するにこれは復習だな。こんな事、今まで数回しかなかったから、慣れてる慣れてないと言われれば慣れてない。むしろ苦手な状況だ。

「いい度胸してるじゃねーか……………」

「はは、お褒めに預かり光栄です」

苦笑いしている自分が馬鹿らしい。

「ム力つく野郎だ……」

突然、女不良が僕に向かって走って来た。さすがに至近距離じゃ避けられない。目を瞑った瞬間、女神の声がした。

《手を、手を早く!》

一瞬の出来事だった。僕は屋根の上にいた。

目の前に居たのは、息を切らして僕の手を掴んでいる田中さんだった。

「ど……どうして」

「こ、これは……お詫びよっ」

顔を真赤にして、僕を見つめていた田中さんは文句ある? と言ってそっぽを向いてしまった。

「……さっきは叩いてごめんなさい」

「いいよ、痛くなかったし」

突然誤ってきたのでびっくりした。痛くなかったと言う事は本当だった。

「それより、どうして田中さんがこんな所に？」

「うーん……何でだろう」

人差し指を唇におき、首をかしげた彼女をに、思い切り抱きつきたと思った。

「……変わってないね、蓮ちゃん」

「……田中さんは変わったね」

「え、そうかな……」

「うん、強くなった」

再開して、初めて名前で呼んでくれた。

「小夜でいいよ？ 私も下の名前で呼ばせてもらってるし」

「……じゃあ、小夜」

「ふふ、ヨロシクね」

キミの笑顔は変わっていなかったよ。

それから僕等は学校抜け出し、近くのファミレスに寄り、家に帰った。

「あれ、小夜って同じマンションだったの？」

「そうよ、悪い？」

性格が戻ってしまったのか、機嫌の悪い小夜だ。無意識の二重人格か？と思わせるように、小夜の性格はコロコロ変わる。ファミレスでご飯を食べた時は機嫌がよかったけど、帰り道は黙り込んで機嫌が悪そうな顔をしていた。

「驚いた、番号は？」

「そんな事聞いてどうするの？」

「いや、遊びに行っちゃおうかなって」

「馬鹿な事言わないの、それに小学校の頃の私達じゃないんだし」

もうっと言って、僕等はエレベーターに乗った。小夜も僕と同じ階だったらしい。何でついてくんのよと、少々機嫌悪そうに言われ、

僕はちょっとショックだった。

「……え」

「隣？」

「う、嘘ー」

運命のいたずらか、神様がくれた贈り物かなんて、正直どっちだっ
ていい。うれしかった。

「……おやすみなさいっ」

「うん、おやすみ」

今日は色々な事が会った。9年間思い続けた人に会えたと思ったら
ピンタを一発。不良に絡まれたり、襲われそうになった所を小夜に
助けられたり。

体力が限界になった僕が、制服のまま眠っていたと知ったのは次の
日のお昼頃だった。

* * *

「……蓮ちゃん」

無意識に彼の名前が出てしまった。

「小夜ー、ご飯よ」

「あ、今日はいない」

「あら、どうして？」

「お、お友達と食べてきたの」

小夜、田中小夜。それが私の名前。顔は普通で、家柄も普通。普通の女の子だ。お友達。その人の名前は稲垣蓮だ。小学校が同じで、私の初めての友達。

「めずらしいわね、あなたが友達と食べるなんて……小学校以来だわね」

「そ、そんな事ないよ」

「それにあんた、今日はいつもと違う雰囲気よ」

「いつもと同じだよ！」

普通の家族だけど、私には父親が居なかった。私が中学校一年生になった次の日に、トラブルを起こして警察に捕まった。そのためか私は転校するはめになった。今は双子の兄二人と、母親で5人でそこそこ大きなマンションで平凡に暮らしている。

「……隣に越してきた男の子、かつこ良かったわよー」

「隣？」

隣……連ちゃんの事かな。確かに連ちゃんてカッコイイけど、へたれだしな。

「あら、小夜知らないの？」

「え……」

「小学校で同級生だった蓮君、覚えてる？」

「う、うん」

「その子と同じ名前の子なのよ、結構似てるし」

だって、本人だもん……。でも、顔は大人っぽくなって変わってい

たのは間違っていない。でも本当に、変わったんだなって思ったところ
は、少し、紳士になった気がする。

「あの子、蓮ちゃんだよ？」

「あら、そんな事知ってるわよ」

「な、じゃあ何でそんな事！」

「小夜が蓮君の事を覚えているかどうか確かめただけよ」

母はべーっと私に舌を出した。自慢じゃないけど、お母さんは周りに
いる他のお母さんより若く見える。でも、若く見えるせいか、怒
られても全然恐くない。むしろ可愛いく思えてしまう。そんな母を
持った私の双子兄の弟の方である愁は極度のマザコンである。

「ただいまー」

「あら、お兄ちゃんズが帰ってきたわ」

双子の兄の方はカッコいい。名前は翔。少々モデルの仕事をやっ
ていて、私が愛読する「ガイア」と言う雑誌の読者モデルをやっ
てる。まあ自慢の兄だ。

「小夜、学校は大丈夫か？」

「うん」

「そっか、それは良かったよ」

翔はいつも私の事を気にかけてくれる。

「あのね、小学校の頃、お友達だった子に会ったの」

「もしかして蓮？」

「あ、当たりー！」

「そうだった」

再開はピンター発（後書き）

まだまだ増やすもん！

TOPライター

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0871m/>

変化しすぎな少女達～噂の田中さん

2010年12月30日07時15分発行